

終拍内の F0 ピーク値が高いことも重要である。ピッチパターンは山型をなすことが多い。また最終拍の長さはほとんど伸長しない。

④停滞調を決定付ける上でもっとも重要な要素は最終拍が長い点であり、通常の句末拍より 1.7 倍ほど長い。

⑤昇降調の特徴は、最終拍末 F0 値が(平均的な発話音声の F0 値より約 25%)低く、最終拍内の F0 ピーク値がやや高い点にある。そして最終拍内のピークの位置が重要である。ピッチパターンは右肩下がりのなだらかな山型をなすことが多い。また停滞調ほどではないが最終拍が通常の句末拍より平均して約 1.2 倍程長い。

### 3-3. 終助詞、間投助詞の音調

以上では、終助詞や間投助詞のある句もない句も一括してその音調をもとに 6 種のイントネーション型に分類し、検討した。ここでは、終助詞や間投助詞のある句の音調とない句の音調の音声的な異同を明らかにする。

#### 3-3-1. 終助詞、間投助詞の音調

終助詞、間投助詞の音調に関するこれまでの研究は、主にアクセントの問題として扱うものと、イントネーションの問題として扱うものとの 2 大別できる。前者は、付属語のアクセントの問題として言及されるが、終助詞、間投助詞の扱いはあまり大きくない。この場合、個別の音声の実現のしかたについて、というよりは、各語(辞)と先行する自立語のアクセントとの関係などに着目し、音韻論的な型を明らかにし記述することに重点が置かれている(服部 1961、川上 1966、和田 1969、木部 1983 など)。これらの成果は各種の辞書の記述に活かされている。しかし、実際の場面で、様々な態度で発話される終助詞にどのような音声的バリエーションがあるのかについての記述に乏しいきらいがある。特に終助詞は、それ自体の機能に加えて、文中でもっとも感情表出の現れやすい文末にあり、イントネーションとの関係を見無視するわけにはいかない。

一方、イントネーションの問題として終助詞を扱うものは、いくつかの音調型に分け、主にそれぞれの機能を問題にする(森山 1989、2001、橋本 1992、轟木 1993、片桐 1995、1997、小山 1997、郡 1997 など)。終助詞とイントネーションを結びつけ、現実の様々な音調を捉えようとしている点で評価できる。しかし、いくつかの音調型に分ける作業が、果たしてどの程度の客観性を

備えているのかについては疑問が残る。「上昇」や「下降」といった一見誰にでも区別できそうな分類でも、「上昇」は本研究で言う「強調」による上昇パターンを指すのか、それとも疑問上昇(本研究での上昇調)のようなパターンを指すのか、「下降」は自然下降なのか、あるいはより積極的な下降なのかなど、その境界は実は曖昧である。それぞれの型の意味や機能を問題にする以上、各型の一般的な音声上の範囲が具体的に示されるべきだと考える。轟木(1993)や郡(1997)のようにそれぞれのピッチパターンを明示するのも有効な方法だが、その際第1章(1-3-1)で述べたように「典型的」なパターンの認定が問題になることもあるだろう。

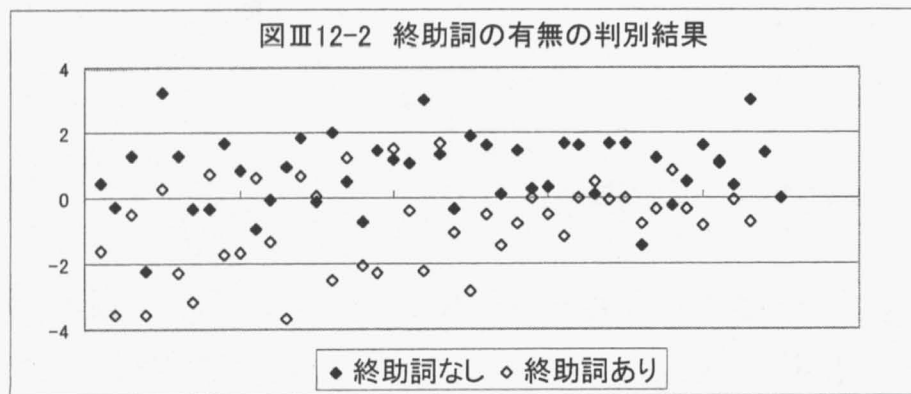
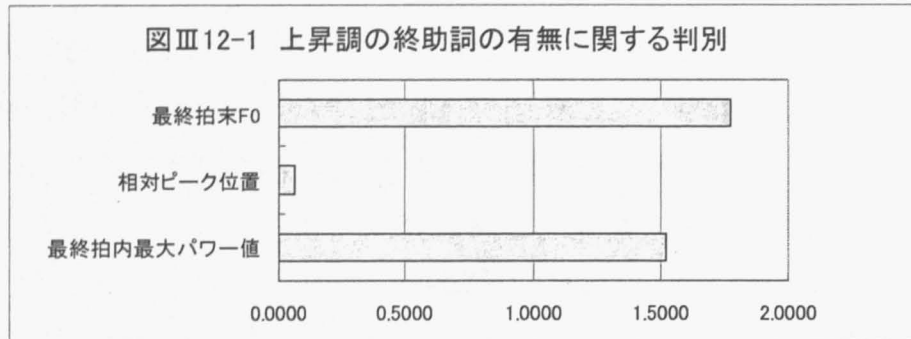
そこで、以下に実際の談話の中で終助詞の音調がどのようなパターンをもって実現しているのかを複数の発話例から明らかにする。また、それらが前節で見てきた6種のイントネーションと音声的にどのような異同があるかについても明らかにする。音調別の終助詞、間投助詞の諸機能についてはここでは触れない。

### 3-3-2. 上昇調の終助詞、間投助詞

本研究資料Bの中で、筆者が上昇調に分類した100例のうち句末に終助詞、間投助詞が付いたものは53例(うち36例は読み上げ式)あった。この53例中、6群判別で正しく上昇と判別されたものは41例、的中率77.4%(2群では43例、同81.1%)である。一方句末に終助詞、間投助詞がないものは47例(うち36例は読み上げ式)で、6群でも2群でも正しく上昇と判別されたものは、そのうちの45例で的中率は95.7%だった。終助詞、間投助詞の付かないもののほうが判別的中率が高い理由は、前述の通りである。つまり、終助詞付きのものは強調に聞こえるものや迷うものがあったとしても上昇調に分類したことにより、上昇調の決め手となる最終拍末F0値が低いものも多く含まれていたのに対し、付かないものにはそのようなケースが少ししか含まれていなかったためである。

はじめに、上昇調内での終助詞の有無による違いを見てみよう。まず、2群判別で正しく上昇と判別されたもの88例について、終助詞の有無によって判別分析の際の説明変数で最終拍に関わる変数の平均の差を比較して見よう(表Ⅲ13)。比較の結果、最終拍内最大パワー値、最終拍F0ピークまでの長さ、最終拍末F0の平均値に有意な差が見られた。次いでこれら3変数を使って終助詞の有無について再度判別分析を行った結果を表Ⅲ14、図Ⅲ12-1,2に示す。図Ⅲ12-1の判別係数から、終助詞のあるものとなないものの違いは、主に最終拍末F0と最終拍内パワー最大値によって説明できそうである。終助詞のないものの方が最終拍末F0と最終拍内最大パワー値がより大きい傾向がある。図Ⅲ13でも分かるように、平均的なパターンも、終助詞の

ないもののほうがより大きな上昇パターンを描いている。



表Ⅲ13 終助詞の有無による各変数の平均の比較

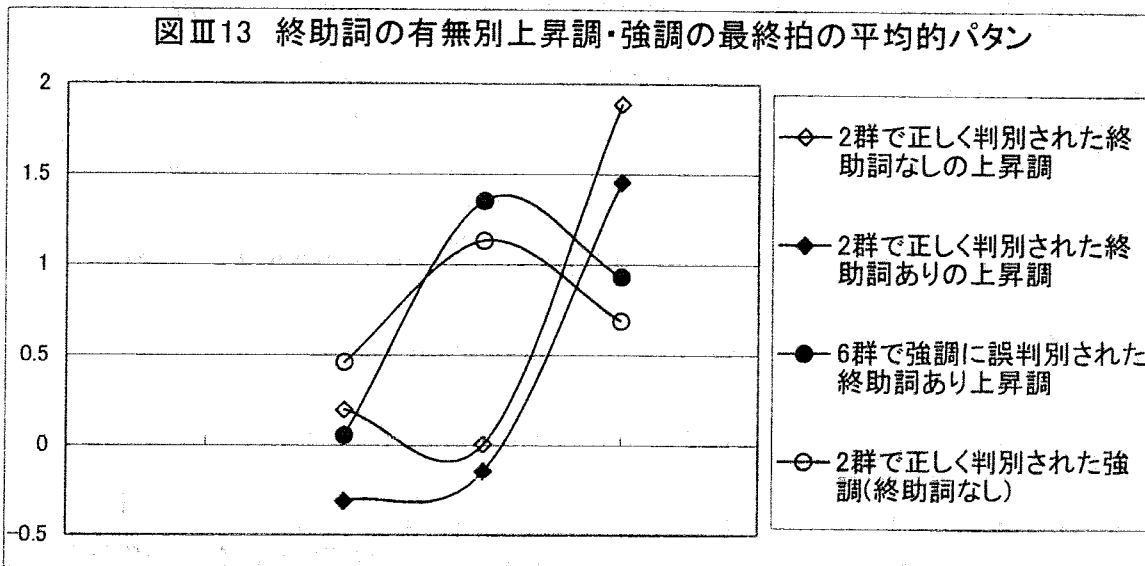
	(★は有意な差のあるもの)		
	終助詞あり	終助詞なし	
最終拍内最大パワー値	0.4388	-0.1073	★
最終パワー値	-2.1276	-2.2230	
パワー下降率	0.9699	0.4544	
最終拍F0ピークまでの長さ	0.2280	-0.2314	★
最終拍長さ	0.2570	0.0325	
最終拍相対ピーク位置	-0.4083	-0.8078	
最終拍末F0	1.8865	1.4568	★
最終拍内F0ピーク	0.0059	-0.1444	
最終拍内F0変化率	1.7248	1.6002	

表Ⅲ14 上昇調の終助詞の有無についての判別の結果

見かけの的中率				判別関数式	
				変数名	判別係数
				最終拍内最大パワー	1.5242
				相対ピーク位置	0.0598
				最終拍末F0	1.7725
				定数項	-3.1792
				F 値	11.5824
				自由度1	3
				自由度2	84
判別的中率	72.7%			P 値	0.0000
				マハラビスの平方距離	1.617859
				誤判別率	26.24%

次に、強調との関係をより明らかにするため、2 群判別で正しく判別された上昇調のうち、終助詞のあるものとなしもの、強調に誤判別された上昇調(終助詞有り)、2 群判別で正しく強調に判別されたもの(終助詞なし)の4 者について再び図Ⅲ13 を見てみよう。これはそれぞれの最終拍開始時、最終拍内 F0 ピーク、最終拍末 F0 の平均値から、平均的音声パターンを描いたものである。強調に誤判別されたものは、強調のパターンにより近く、山型を描いている。

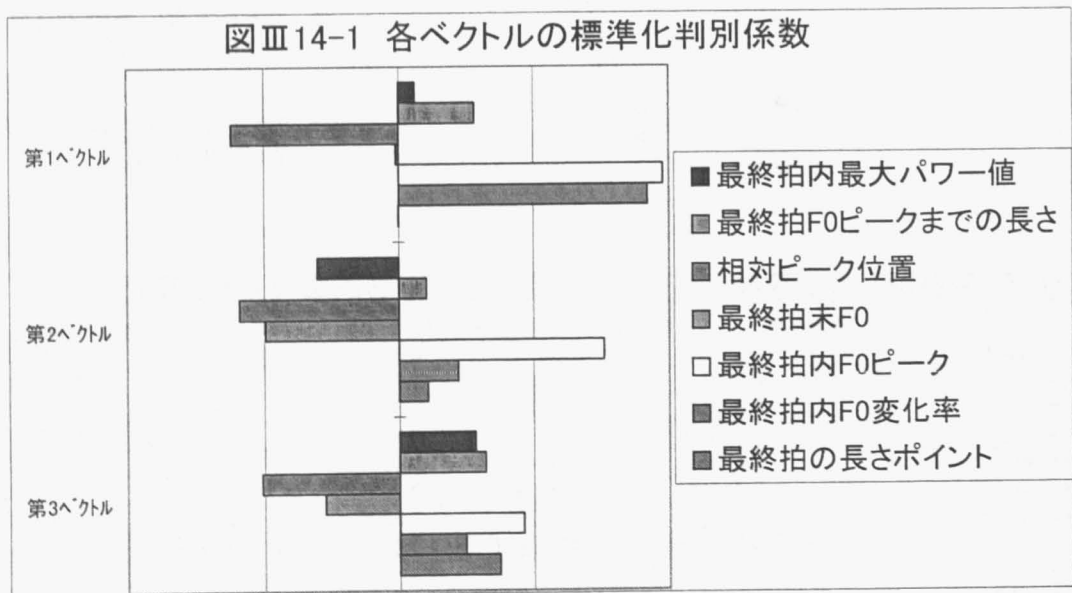
さらに、これら4 者について判別分析の際の、説明変数の平均値の差を比較し(表Ⅲ15 参照)、差の大きかった最終拍内最大パワー値、最終拍内 F0 ピークまでの長さ、相対ピーク位置、最終拍末 F0、最終拍内 F0 ピーク値、最終拍内 F0 変化率を説明変数にして判別分析を行なった。結果は図Ⅲ14-1、表Ⅲ16 に、散布図は図Ⅲ14-2 に示す。この結果からも終助詞の有無によって、同じ上昇調内でもその内部で音声的な差があるということが読み取れる。



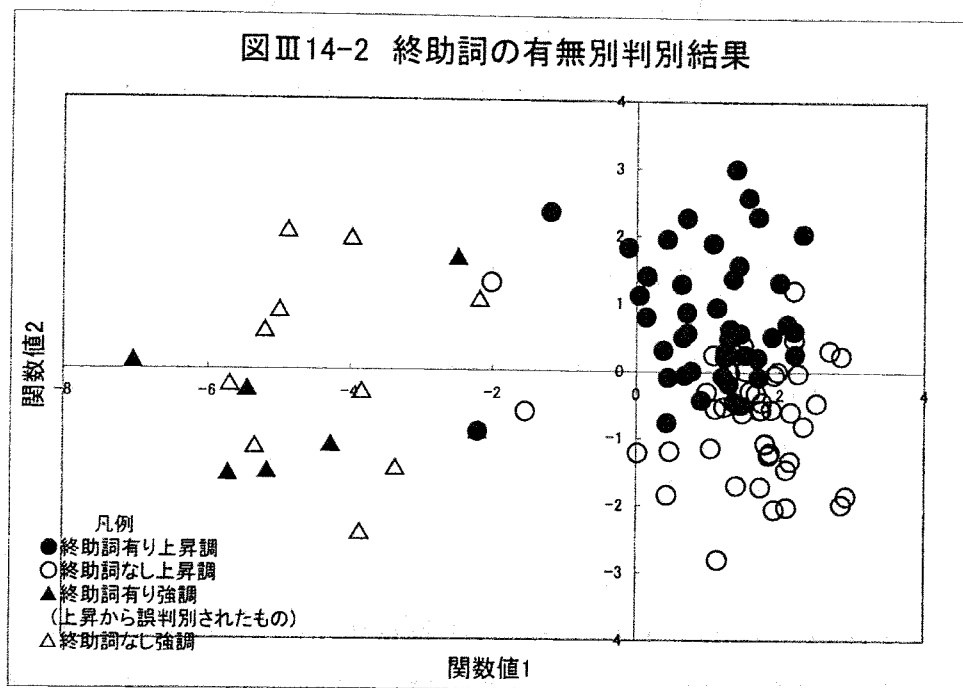
表Ⅲ15 上昇調と強調及び終助詞の有無による各変数の平均とその比較

	全上昇調	終助詞あり上昇調	終助詞無し上昇調	全強調(終助詞無し)	終助詞あり強調
最終拍内最大パワー値	0.17195	0.43877	-0.10729	0.82682	0.48201
最終拍F0ピークまでの長さ	0.00351	0.22799	-0.23142	0.45365	0.50060
相対ピーク位置	-0.60350	-0.40828	-0.80780	1.29642	1.74549
最終拍の長さポイント	-0.17636	-0.20617	-0.14517	0.77387	-0.14517
最終拍末F0	1.67652	1.88649	1.45678	0.68915	0.93347
最終拍内F0ピーク	-0.06752	0.00594	-0.14440	1.13287	1.35466
最終拍内F0変化率	1.66391	1.72478	1.60021	-0.59967	-0.65820
(終助詞有り強調以外は2群判別で正しく判別されたものみの平均)					
★は有意な差のあるもの	上昇/強調	上昇:終助詞有/無	強調:終助詞有/無	強調:終助詞有/無	
最終拍内最大パワー値	★	★	★		
最終拍F0ピークまでの長さ		★			
相対ピーク位置	★		★		
最終拍の長さポイント	★		★		
最終拍末F0		★			
最終拍内F0ピーク	★		★		
最終拍内F0変化率	★		★		

見かけ的中率		判別された群				
		終助詞なし上昇調	終助詞あり上昇調	終助詞し強調	終助詞あり強調	
実際分類	終助詞なし上昇調	38	6	0	1	
	終助詞あり上昇調	8	34	0	1	
	終助詞なし強調	0	0	7	3	
	終助詞あり強調	0	0	1	6	
判別的中率		81.0%				
正準判別空間における群の重心						
群	第1ベクトル	第2ベクトル	第3ベクトル			
終助詞なし上昇調	1.200145066	-0.669292818	0.057614118			
終助詞あり上昇調	0.644750438	0.768701913	-0.07524134			
終助詞し強調	-4.688980105	0.076484196	0.753820226			
終助詞あり強調	-4.977278985	-0.528708883	-0.98507348			
判別関数式						
変数名	第1ベクトル		第2ベクトル		第3ベクトル	
	判別係数	標準化判別係数	判別係数	標準化判別係数	判別係数	標準化判別係数
最終拍内最大パワー値	0.1950	0.1215	-0.9760	-0.6082	0.9029	0.5626
最終拍開始～F0ピーク間長さ	0.6079	0.5599	0.2215	0.2040	0.6910	0.6365
相対F0ピーク位置	-0.9948	-1.2359	-0.9499	-1.1802	-0.8188	-1.0173
最終拍末F0	-0.0458	-0.0221	-2.0537	-0.9914	-1.1518	-0.5560
最終拍内F0ピーク	1.6501	1.9555	1.2828	1.5202	0.7792	0.9235
最終拍内F0変化率	2.7185	1.8438	0.6450	0.4375	0.7208	0.4889
最終拍の長さポイント	-0.0016	-0.0012	0.2944	0.2135	1.0245	0.7430
定数項	-4.0426		2.1355		0.3058	
ハートレットのカイ2乗値	221.4873598		49.83449191		11.81193655	
自由度	21		12		5	
P 値	2.04118E-35		1.49381E-06		0.037457557	
固有値	4.712568283		0.4711079		0.127404556	



また、便宜上、上昇調に一括してしまった終助詞の中には強調に分類すべきものもあるのではないかと読み取れる。この点について、宮地(1963)は「純然たる終助詞」の「ヨ」、



「ワ」、「ゾ」などは質問の上昇調となることはなく、すべて強調(宮地自身は「高調」と呼んだ。\* 筆者注)になる旨を指摘している一方、吉沢(1960)における昇調1、昇調2の「ナ」、「ネ」、「ヨ」などは違いがはっきりしないと指摘している。いずれにせよ、終助詞の音調、特に上昇調と強調の区別に関してはさらに資料を増やして検討し、知覚実験で確認する必要がある。

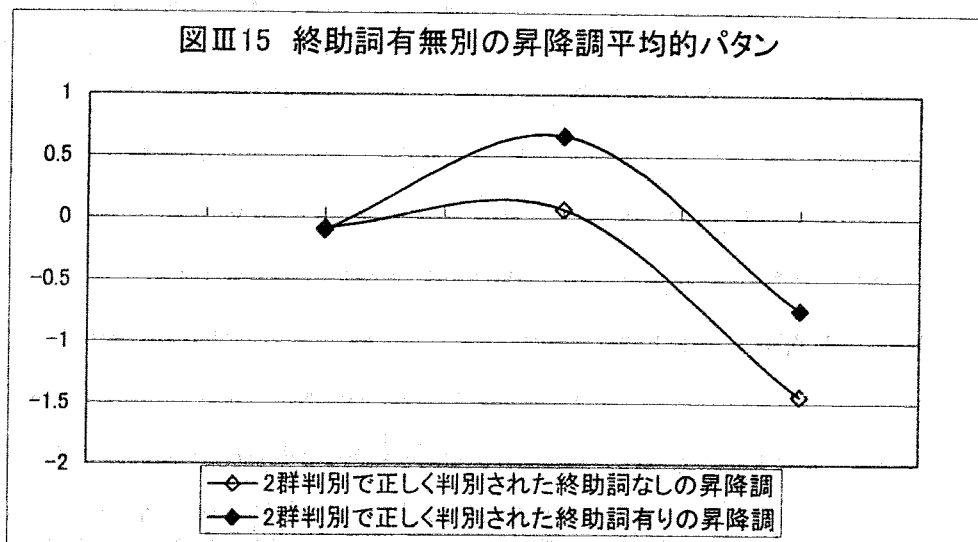
### 3-3-3. 昇降調の終助詞、間投助詞

次に昇降調に分類した終助詞「なあ」、「ねえ」や間投助詞「ね(え)」の音調とその他の昇降調の音調について比較する。これらの音調は、上昇後下降をとめない、やや長く伸びるという点で、いわゆる「尻上がり」イントネーションとともに昇降調のパターンを持つ。ただし、先述の通り同じ音調であっても、終助詞、間投助詞のそれは、いわゆる「尻上がり」イントネーションとは認識されないという調査結果が出ている(井上1994)。筆者が聞いて昇降調に分類した93例のうち、終助詞、間投助詞が付くものは17例で、そのうちの6群判別では6例(的中率35.3%)、2群判別では8例(同47.1%)のみが昇降調に判別された。一方終助詞、間投助詞の付いていない76例は6群判別で41例(的中率53.8%)、2群判別で56例(同73.7%)が昇降調に判別された。

2群判別で正しく昇降調に判別されたもののうち、終助詞の有無による平均的音声パターンの違いを図Ⅲ15に示す。これは先に見た上昇調と同様、それぞれの最終拍開始時F0、最終拍内F0ピーク、最終拍末F0の平均値を結んだものである。双方とも右肩下がりの山型パターンを示

すが、終助詞なしの方がピークが低く、最終 F0 はより低い位置にある。また、判別分析の際、両者の説明変数の差が大きかったものは表Ⅲ17の通り、最終拍末 F0 値、最終拍内 F0 ピーク値、最終拍内変化率、最終拍内 F0 ピークまでの長さ、相対ピーク位置だった。

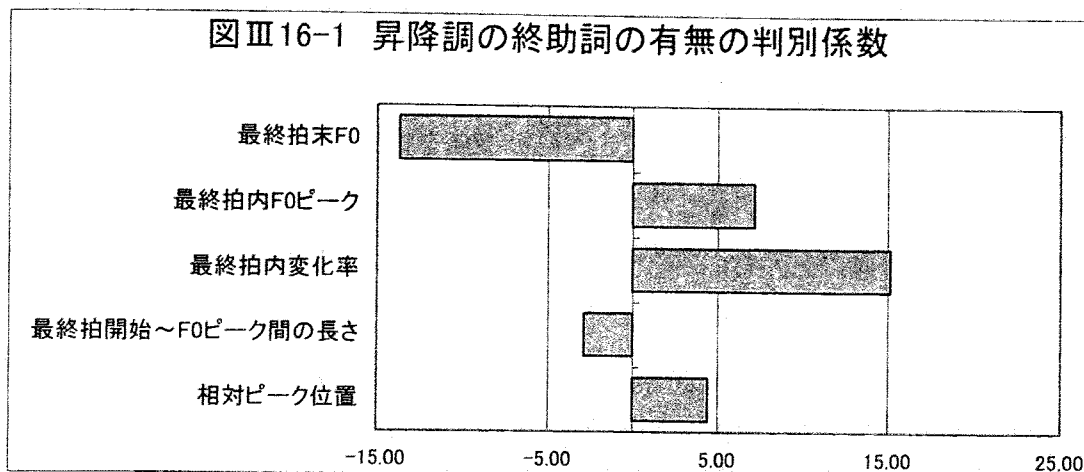
これらを説明変数にして終助詞の有無について判別分析を行なった結果を表Ⅲ18、図Ⅲ16-1に、散布図を図Ⅲ16-2に示す。図Ⅲ16-1から、最終拍内 F0 変化率と最終拍末の F0 値が終助詞の有無を分ける主要素になっていることが分かる。最終拍の F0 変化率の平均は終助詞無しが-0.564、終助詞ありが-0.996となっている。終助詞ありの方が下降の度合いが大きい、最終拍末 F0 値は逆に終助詞無しより高い。これは下降に先立つ上昇部分大きいことを示していると考えられる。終助詞ありの昇降調は、より強調に近いと言えるだろう。これに対して終助詞のないものは、最終拍末 F0 値が終助詞のあるものより低く、また変化率に関する数値の絶対値が小さく、すなわち変化率(下降率)が小さく、図Ⅲ16-2の上方に集まっている。



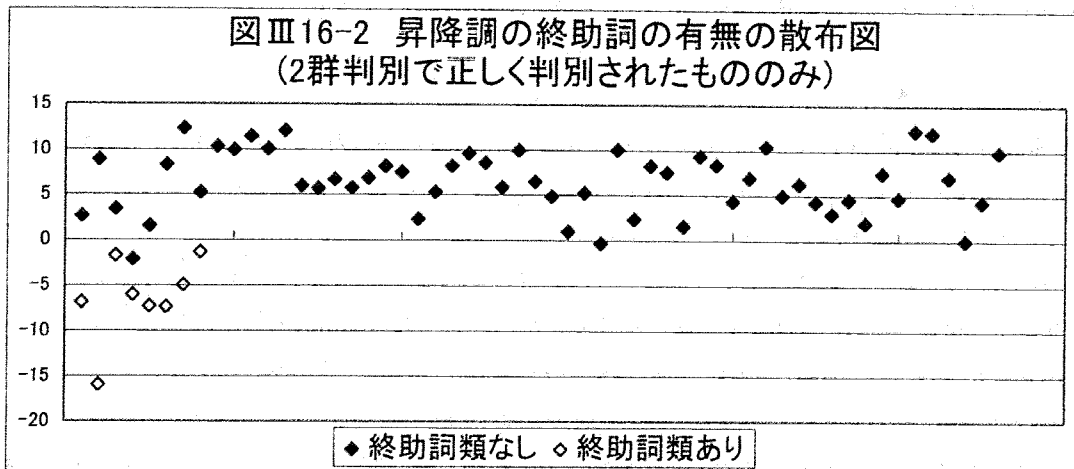
表Ⅲ17 終助詞の有無による昇降調の各変数の比較

	終助詞なし	終助詞あり	(★は有意な差のあるもの)
最終拍内最大パワー値	0.729	0.962	
最終パワー値	-1.738	-1.200	
パワー下降率	0.006	0.430	
-2拍目の長さ	0.393	-0.053	
最終拍内F0ピークまでの長さ	0.304	-0.643	★
最終拍長さ	0.751	0.658	
相対ピーク位置	-0.895	-1.722	★
-2拍目長さポイント	-0.174	-0.203	
最終拍長さポイント	-0.145	-0.056	
-2拍目開始時F0	0.045	-0.761	
最終拍開始時F0	-0.087	-0.101	
最終拍末F0	-1.444	-0.742	★
最終拍内F0ピーク	0.068	0.665	★
最終拍内F0変化率	-0.564	-0.996	★

図Ⅲ16-1 昇降調の終助詞の有無の判別係数



図Ⅲ16-2 昇降調の終助詞の有無の散布図  
(2群判別で正しく判別されたもののみ)



見かけの的中率		判別された群	
		終助詞類なし	終助詞類あり
実際の群	終助詞類なし	54	2
	終助詞類あり	0	8
		判別的中率 96.9%	
判別関数式			
変数名		判別係数	
最終拍末F0		-13.70	
最終拍内F0ピーク		7.17	
最終拍内変化率		15.16	
最終拍開始～F0ピーク間の長さ		-2.86	
相対ピーク位置		4.43	
定数項		-0.4582	
F 値		16.82535052	
自由度1		5	
自由度2		58	
P 値		0.0000	
マハラビスの平方距離		12.8469429	
誤判別率		3.66%	



上昇調の場合は、終助詞ありの方が上昇の度合いが小さかったが、昇降調の場合は終助詞ありの方が上昇部分と変化率(下降率)が大きく、昇降パターンがより際立っている。上昇調の場合は、終助詞、間投助詞がつくことによって「上昇」の機能を補充できる、あるいは終助詞、間投助詞自体に上昇調と共通の機能があるため、音声的には省力化が可能だと考えられる。そのために終助詞ありの上昇調の上昇を小さくすることは、発話の労力の点から見て経済的で合理的だろう。

これに対して、昇降調の場合、終助詞ありの方が、かえって音声的に極端なパターンを伴うものが多いのはなぜだろう。一つの理由として考えられるのは、終助詞なしの場合、音声的に極端なパターン、つまり上昇部分が大きく、F0の下降率の大きいものは、いわゆる「尻上がり」イントネーションとして1980年代に非難された典型的な音調パターンに近く、このような極端なパターンが避けられたためではないか、ということである。井上(1997, p.159)によれば、「言語変化が抵抗の少ない形で進むのに、様々な形で中間的な形態(「中間方言」など)をとることが観察されている」という。終助詞なしの昇降調は、昇降調パターンを際立たせたくないという心理が働くが、一方で終助詞ありの方は、そのような制約がないため昇降調パターンがはっきり現れたのではないだろうか。実際、本研究で扱った資料でも、若年層の発話では、それほど極端なパターンの昇降調はあまり見られず、先に見たように停滞調や平調に誤判別されるものも多かった。

### 3-3-4. 平調の終助詞、間投助詞

最後に、終助詞が付くもので平調に分類したものについて述べる。これは303例中、「よ」が3例、「か」が4例、計7例だけだった。2群、6群判別の際、このうちの1例だけが停滞調に誤判別された。2群判別でも6群判別でも正しく判別された終助詞のない平調と、この正しく判別された6例の終助詞ありの平調については、各説明変数間に有意な差は見られなかった。平調に関しては、終助詞や間投助詞が付いていようがまいが、音声的には「無標」であることには違いがないようである。ただし、終助詞の付いた平調はケース数が少ないので、さらに検証が必要だろう。

### 3-3-5. 終助詞、間投助詞の音調とイントネーション

本資料に現れた終助詞、間投助詞の音調は、おおよそ平調、上昇調、強調、昇降調の4種に分類できるものと考えられる。ただし、終助詞、間投助詞以外の音調と同様、その音声的境界

は必ずしも明確ではない。平調については、終助詞の有無によって音声的パターンに大きな違いは見られなかった。これに対し、上昇調では、終助詞、間投助詞のあるものの方が無いものより上昇が小さい傾向が見られた。また、上昇傾向のある終助詞、間投助詞は便宜上、すべて上昇調に分類したものの、その中のいくつかは強調に分類すべきものがあることも明らかになった。従来も、上村(1989)を始め、吉沢(1960)や郡(1997)など上昇系イントネーションに「疑問上昇」と「強調上昇」の2種認める立場があるが、以上の結果からもこれらの立場を支持できるし、同様に終助詞の音調に関しても2種認めることができるものと考えられる。

昇降調に分類したものについては、終助詞、間投助詞の有無による音調の違いは、上昇のときと逆だった。終助詞のあるものの方は昇降調パターンが極端で、より強調に近かった。郡(1997, p.190, p.195)は、文末イントネーションの型の一つに「上昇下降調」を挙げ、これを「強調上昇+下降」と補足説明している。文末での用例としては「「はやくう!」(下線は原文では文字の上にあった\*筆者注)などと促すときに使える」とし、さらに「文節末を上昇下降調で言うと、いわゆる「尻上がり」の言い方として識者のひんしゆくを買う言い方となる」と述べている。郡(1997)の言う上昇下降調は、ここでいう昇降調にほぼ該当するものと考えられるが、終助詞にかかる昇降調の音調は「強調」に下降が加わったと見た方が妥当であろう。「それでね」と「それでねえ」の違いも上昇調と昇降調と見るより、前者の「ね」が強調で、後者が「強調+下降」である昇降調とした方が整合性があると考えられる。

以上、終助詞の有無による音調の違いを各イントネーション別についてまとめると次のようになる。

- ①平調の音調パターンは終助詞の有無による違いはない。
- ②上昇調の音調パターンは終助詞ありの場合、無しの場合より上昇が小さい。
- ③強調の音調パターンは終助詞の有無による違いはない。
- ④昇降調の音調パターンは、終助詞のある場合はより強調に近い極端な山型パターンになり、ない場合は停滞調に近く上昇部が少ないならかな右肩下がりの山型パターンになる傾向がある。

但し、③の強調についてはケース数を増やしてさらに検討が必要だと考える。また、読み上げ音声以外では、下降調に当たるものが含まれていなかったため、下降調について終助詞の有無による違いは言及できなかった。実際は、がっかりしたような口調で発話される「ダメだったかァ↓」や少しあきれたような口調で発話される「まだ寝てたのォ↓」など下降調で終助詞のあるものと、「あら、サザンのファンなんだァ↓」や、「アア、もう、すぐ泣くゥ↓」のような

終助詞のない下降調が考えられる。これらに音声的な差があるかどうかについては今後の課題としたい。また、停滞調の音調をとる終助詞や間投助詞は、筆者の内省では思い至らなかったため、言及しなかった。

### 3-4. 各イントネーションの機能

次に、各イントネーションの機能について本資料の用例を中心にみていくが、本資料中に使用例のないものについては、他の用例(作例も含む)を適宜補う。

#### 3-4-1. 平調

これは、上村(1989)の「基本音調」に対応するもので、話し手がある事柄を「普通の」態度、特に表情をつけずに表明する時の音調であり、*neutral*、*unmarked*であることを示す。日常の会話においてすべてこの調子で話せば、非常に無表情で、冷淡な印象を与えるだろう。しかし、ニュース原稿の朗読やドキュメント番組のナレーションでは、冷静かつ客観的な印象を与えるため、もっとも自然で普通の調子である。実際この音調は以下のように、ニュースや小説の地の文の朗読などに現れる。

女性アナウンサー：次は埼玉県の浦和、大宮与野の三市合併問題です。…  
(テレビニュース。資料 B の *fnew01*、*fnew02*)

俳優：もう絶望の人晋吉だった。声がのどにひっかかりでもするように…  
(小説の朗読 CD。資料 B の *maka01*、*maka02*)

女性アナウンサー：こんにちは。すこやかシルバー介護です。  
(テレビの対談番組の司会。資料 B の *fkai01*、*fkai02*)

以上の例からもわかるように、「文」末、非文末に関わらず、句末を特別に変化させず、「普通」の態度で述べるときに現れる音調であり、語アクセントレベルでの音調がそのまま現れた状態と言える。宮地(1961)の「文の基本的音調」に当たる。したがって、本研究では終助詞がついた場合でも特に上昇、下降が認められないものは平調として扱った。